

京都西陣創造集団アノニム「恭々しき娼婦」

この作品の小説が紹介されると共に、「実存主義」と言う言葉が日本に入ってきた。作者は戯曲も多く書いている。この日本初演は 1952 年 7 月、翻訳者の演出で、所属の「文学座」でされた。

アメリカには不法移民が流れ込み、安い労働力が供給され、「プーアホワイト」の生活は苦しくなる。この黒色・褐色・黄色等の「有色人種」に対する不満が現在のトランプ大統領を誕生させたのか。そして現在の「イスラム教徒」への嫌悪と恐怖に結び付くのか。

＜舞台＞はアメリカ南部。第二次世界大戦直後らしい。背景一杯に白いスクリーンを先ず見せ、そして舞台となる「室内」になる。

此处は、この街に流れ着いた娼婦リッジーの部屋。欧米の列車は殆どがコンパートメント形式。彼女が乗り合わせた、そこで殺人事件が起こる。同室の黒人を殺したのは白人。だが恐怖から逃げたもう一人の黒人を犯人に仕立てようと、警官たちもグルになって黒人を追う。それを伏線にして、この舞台は進行する。

劇団は 1986 年に旗揚げというだけあり、「舞台創り」には年期が入っている。「舞台美術」もシンプルだが室内の景色は適切。

コンパートメント同室から逃げた黒人が「助けを求めてくる」。昨夜の客となったフレッドも、実は「犯人の白人」の関係者。警官たちが次々とやってくる。そして、この地域の上院議員クラークまで訪れる。「真実」を話すのか、それとも「ことなかれ」と眼をつむるのか。人間として、どうするか。決断を迫られるリッジー。

構図は単純だが、思えば誰もが遭遇する「場面」である。安易な生き方を選ぶのは簡単だが、誰しも「心のうずき」が残る。その葛藤を態度表現で現しているのが、よく解る。これは観客たちにも、自分の周囲で起こった「様々なコト」を思い起こすだろう。

リッジーの真野斗志子。「一人芝居」に近い役をよく演じている。「日本人」と異なり、心の変化を「胸のうち」ではなく、アクションで表現する。これがある程度出来ている、とみた。だが、男たちは各々、もう少し「印象」づけてもいいのではないかな。

宣材に『「アメリカ国民」って誰のこと？』とある。「移民」ならば、白人も黒人も同じ立場と言える。だが、人間は自分と他人に何らかの「差」を付けたがる。この習性との妥協は案外難しい。

最後に、「うやうやしき」は「恭しき」だと思うが。

今泉おさむ（日本演出者協会）